被災の記録

一枚の炬燵掛

相田アキ（習志野台・70歳）

私は今年70才になりました。敬老の日には市から御祝いを頂き感謝しております。併しこれ迄生き延びてきた我が人生をふり返ってみて、到底忘れることの出来ないあの太平洋戦争のことをどうしても書き残しておきたいと思ひ筆をとることにいたしました。

私の主人は当時郵政省の無線の方の仕事をしていましたので、召集にはならないということでしたが、戦局の悪化するにつれ学徒出陣にまで及び主人にも遂に赤紙（あかがみ）が来て昭和十九年一月二十六日東京の赤坂隊に入隊したのです。当時は何事も秘密に行われその後何処に転属されたのか全然分かりませんでした。只外地には行ってない、多分東京にいるらしいということだけは何となく分っていました。そして私は姑と二人出征兵士の家族という名のもとに不安な日々を過ごしていましたが、近くの郵便局で臨時に事務員を募集しているのを知り全く未知の世界でしたが応募して勤めることになりました。家からは五分位で行ける所でしたし切手葉書の窓口でその日に割り当てられた分を売るのですが、いつも局の前は行列ですぐ売切れとなってしまうのです。それでもその年のお正月には新年の挨拶に出向き大変な御馳走を頂き姑と二人何も彼も不自由な生活をしてゐた者としては只驚くばかりで、こんな御時世でもある所にはあるもんだなあとつくづく感心したものでした。お正月も過ぎた頃より空襲は度々あり防空壕を出たり入ったりの毎日でした。

その年の三月です。下谷方面に大空襲があって上野浅草方面は全滅で随分多勢の人が死んだということを聞かされました。私は小さい子供もいなかった故か、やがてそれが自分にふりかかってくる災難とは夢にも思わず対岸の火事といった思いでいたのです。併し姑は早速老人疎開ということで福島県の故郷に疎開してもらい私はたった一人東京に残ったのです。

そして間もなく五月二十三日、私の実家のある渋谷辺りが空襲となり、兄夫婦子供一人命からがら姉の居る世田谷に避難して居ることを知りました。私は見舞いの積りで姉の家に行き、八時を過ぎた頃家に戻ろうとして京王線の下高井戸駅から電車に乗り、幡谷（はたがや）駅まで帰る積りでしたが、笹塚辺りでパアッと電車の中が明るくなったと思った途端パンパンともの凄い音、何か炸裂する音のようで辺りは真昼の如く明るくなり、バラバラと何かが落ちてくるような気配です。電車も止まりました。私は走って家に戻ろうとしてもう道は逃げ惑う人でごった返しです。私は何も考えるひまはありません。夢中で家に戻りたった一枚の炬燵掛を引張り出しそれを防火用水桶の水にざんぶりつけて頭からかぶったのです。そして一目散に逃げたのです。熱い熱い灰が落ちてくるのですが、その炬燵掛のお陰で私はやけどもせずに逃げきることが出来ました。炬燵掛は私が嫁入りの時実家

の母の手作りの刺子で木綿の厚地に一針一針刺したもので相当に重量のあるものでした。此の刺子のお陰で私は命を救われたのです。逃げずに家を守った人、防空壕に入った人、犠牲者は数えきれぬ程でした。夜が明けて空襲も納まり敵機も退散した後、私は只呆然として炬燵掛一枚を握ったまま、一面焼野原と化した土手の上に立っていたのです。勿論跡形もなくなってしまった我家に戻り声も出ず只助かったということだけを実感したのです。そして局に行ってみたのです。辺りの人が大騒ぎをしています。局長さんと若い息子さんが二人見つからないのです。残された奥さんは反狂乱、みんなで手分けして探し廻り、最後迄局を守りつづけ遂に帰らぬ人となってしまわれたのです。働き盛りの局長さんと若い学生の息子さん二人でした。本当に悲しい思い出ばかり、赤ちゃんをおんぶした人、子供の手をつないだ人、死体はあちこちに横たわっていました。そして軍のトラックが来てその犠牲者をスコップですくって運び去っていったのです。此の世の地獄でした。でも私は助かったのです。一枚の炬燵掛が私の命を救ってくれました。私は警察で罹災証明書をもらい、その足で上野から無蓋車に乗り姑のいる田舎に帰りました。その年の八月十五日戦争は終りました。間もなく主人も帰ってきて戦後のきびしい生活に入り今に到っています。

私は一枚の炬燵掛に救われて今の幸福な生活を得ることが出来ましたが、戦争のために尊い命を失った多勢の人々を忘れることは出来ません。戦後の生活は斯くして尊い命を捧げて下さった方々の上に成り立っているのです。どうぞこの尊い命を無にしないように平和な時代がこれからずっと続くように祈るばかりです。

終戦記硝煙残る上着干す　　あき子